# 2007年7月に世界遺産登録！

## 石見銀山遺跡とその文化的景観(※)

石見銀山は、1526年に九州博多の豪商神屋寿禎(かみやじゅてい)によって発見されて以来、1923年の休山まで約400年にわたって採掘されてきた世界有数の鉱山遺跡です。

大航海時代の16世紀、石見銀山は日本の銀鉱山としてヨーロッパ人に唯一知られた存在でした。16世紀半ばから17世紀はじめには、世界の産銀量の約3分の1を占めた日本銀のかなりの部分が、石見銀山で産出されたものだったと考えられています。

石見銀山で産出された銀は高品質で信用が高く、アジア諸国とヨーロッパ諸国を交易で繋ぐ重要な役割を果たしていました。

2007年7月、環境に配慮し、自然と共生した鉱山運営を行っていたことが特に評価され、「石見銀山遺跡とその文化的景観」として、鉱山遺跡としてはアジアで初めての世界遺産に登録されました。

※文化的景観…人間と自然とが関わりあっていることを示す景観

1595年にヨーロッパで作られた日本図(ティセラ日本図)。
石見の位置に地図上で唯一銀鉱山と記されている。

(島根県立古代出雲歴史博物館蔵)

## 石見銀山遺跡とその文化的景観がもつ世界遺産としての普遍的価値

### 〈1〉世界的に重要な経済・文化交流を生み出した

16世紀、石見銀山では、東アジアの伝統的な精錬技術である灰吹法(はいふきほう)を取り入れ、良質な銀を大量に生産しました。日本史上まれな銀生産の隆盛により、大量の銀が貿易を通じ、16世紀から17世紀の東アジアへ流通したことで、東西の異なる経済・文化交流が行われました。

### 〈2〉伝統技術による銀生産方式を豊富で良好に残す

江戸時代の石見銀山では従来の伝統技術による銀生産が続けられました。しかし、明治維新を迎えた19世紀後半以降、ヨーロッパの産業革命で発展を遂げた新技術が導入されましたが、銀鉱石が枯渇したために鉱山活動が停止しました。その結果、今日、石見銀山遺跡には鉱山開発の伝統的技術による銀生産の跡が良好に残されました。

### 〈3〉銀の生産から搬出に至る全体像を不足なく明確に示す

石見銀山遺跡は、銀の採掘から精錬、搬出に至る鉱山運営の全体像を不足なく明確に示しています。また、銀山に関係する遺跡と豊かな自然環境が一体となって文化的景観を形成する例は、世界的に極めて貴重です。

坑道及び周辺図

記念スタンプをどうぞ。

大田市マスコットキャラクター
らとちゃん
©2012大田市 K141

[らとちゃんは螺灯(らとう)と鉱夫の衣装がモチーフ。螺灯とは、かつて石見銀山の間歩(坑道)でも使われた、サザエの殻に油を入れて火を灯す明かりのこと。恥ずかしがり屋さん、だけどいったん「火」がつくとソコヌケに明るい性格。頭に揺れる小さな炎で、人々の心や地域の未来に明かりを灯します。]

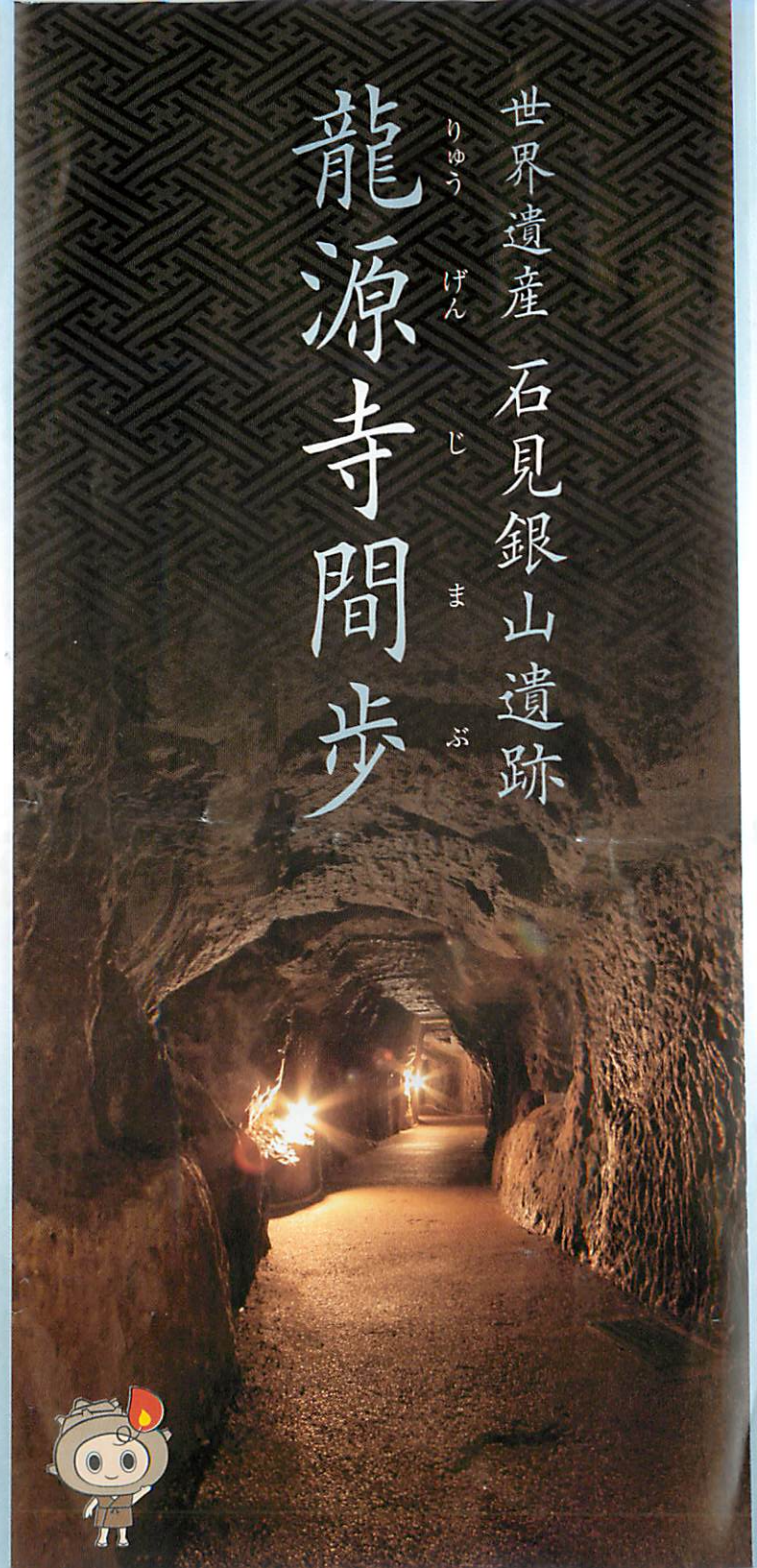
◆見 学 … 9時～17時　冬期：9時～16時（最終入場は10分前まで）
◆料 金 … 大人410円(団体310円)、小人(小・中学生)210円(団体150円)
※団体割引20名以上

お問い合わせ


**石見銀山 龍源寺間歩**
島根県大田市大森町 TEL0854-89-0347(出口管理棟)

**大田市役所(観光振興課)**
島根県大田市仁摩町仁万562番地3 TEL0854-88-9237


大田市は、ユネスコの「世界平和と人権尊重」の精神に基づき、世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」の保全、活用を進めています。



# 龍源寺間歩 平面図

入口

**ひおい坑**

岩石の隙間に板のように固まっている鉱物の層（鉱脈）を追って掘り進んだ小さな坑道を「ひおい坑」と言います。

**竪坑**

垂直に掘られた坑道のことで龍源寺間歩に溜まった水を約100m下の永久坑道へ排水したと言われています。

出口

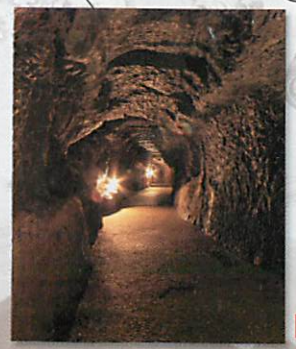
出口付近の右壁には「石見銀山絵巻二巻」を電照板で展示してます。

管理棟（出口）

管理棟（入口）

旧坑道

新坑道



旧坑道

新坑道

## その他の間歩

**新切間歩**（銀山川向かい）

正徳3年(1713)、水抜き鉱として掘られましたが、享保年間(1716～36)に鉱脈に当たり、盛山となりました。

**福神山間歩**（市道沿い）

入口から斜坑となり、川の下を横切って延びる特殊な坑道です。

**新横相間歩**

（佐毘売山神社南東の昆布山谷）

江戸中期以後に開発され、良鉱石を多く産出しました。

## 間歩（まぶ）とは？

「間歩」と呼ばれる、銀鉱石を採掘するための坑道。岩を削り、人ひとりがやっと通れるほどの坑道がどこまでも続く…そのスケールと坑道を作り上げた人の力に驚かされる。石見銀山には、大小６００余り点在している。

## 龍源寺間歩（りゅうげんじまぶ）

石見銀山には大小あわせて600箇所を超える間歩（水抜き・通気用、試掘を含む。）があることが分かっていますが、龍源寺間歩は江戸時代前期、大久保間歩（870m）に次ぐ大坑道で、昭和18年まで稼動していました。

永久・大久保・新切・新横相の間歩とともに5カ山と呼ばれていました。当時の間歩の入口には、四ツ留番所が置かれ、右側に役人詰所、左側に鏈置場（銀鉱石置場）があって、坑道内は厳重に見張られていました。

周辺に見られるシダは、ヘビノネゴザというオシダ科のシダで、貴金属を好む性質を持ち、金銀山発見の手がかりになったと言われています。

横幅2尺高さ4尺を、1日5交代で、10日で10尺掘ったと伝えられています。

本来の長さは６００ｍに及んでおりますが、平成元年に１５７ｍのところから新しく坑道（栃畑谷新坑）が設けられ、観光用に公開されました。

本来の長さの４分の１しか見ることができない訳ですが、間歩の壁面には当時のノミの跡がそのまま残っており、また20余りのひ押し掘り（鉱脈に沿って掘り進んだ横穴）や垂直に１００ｍ掘られた竪坑を見ることができます。

左折してやや登り加減に続く新坑の長さは116mで、この右壁には「石見銀山絵巻」の電照板が展示してあり、歩きながら当時の坑内の様子が楽しめます。